フランス解放のシンボルとしての
フォーレ生誕百年祭

神　保　夏　子

1945 年、人々は父の生誕百年を祝った。この記念行事が行われたのはナチスの降伏の四日後であった。我々は五年にわたり多くの深き淵からの呼び声がわき上がっていた闇から徐々に抜け出しつつあった。（Fauré-Fremiet 1957, 133）

序

1924 年 11 月 8 日、パリ 8 区のマドレーヌ教会では、かつてその正オルガニストの座にあった作曲家ガブリエル・フォーレ Gabriel Fauré（1845-1924）の国葬が、国民教育大臣の参列のもと大々的に営まれた。もっともこの大臣は、フォーレの友人らによって国葬の申請が出された際、「フォーレとは何者か」との問いを発したという居心地の悪い逸話が残っている（Nectoux 2008, 604）。国立パリ音楽院（当時の名称は国立音楽・朗唱学校 Conservatoire national de musique et de déclamation）の作曲科教授と院長を歴任し、学士院の会員にも選出されたフォーレは、そのキャリアの後半において確かにフランスの音楽界における重要な社会的地位を確立していた。しかし、一般社会における彼の作曲家としての知名度は、その最期まで比較的慎ましやかなものであった。

そこから 20 年余りの時を経て、フォーレは再び国家的な行事の対象となった。1945 年にパリで行われた彼の生誕百年を祝う一連の記念行事（コメモラシオン）（以下「百年祭」と記す）である。奇しくもそれは、第二次世界大戦中の四年間にわたってパリを含むフランス国土の約三分の一を支配したナチス・ドイツの降伏の数日後に幕を開けた。従来の研究では、この 1945 年の百年祭は、作曲家の没後の伝承の一端を示すものとして、あるいは出演者の経歴の一部として、あくまで表面的・散発的に言及されるにとどまっていた（Nectoux 2008, 607; Dunoyer 1993, 134）。本稿では、これまで詳細な背景が明らかにされてこなかったこの百年祭を、解放期のフランスという固有の歴史的文脈との関係からとらえ直すとともに、そこでフォーレに付与された一種のナショナル・アイコンとしての意味づけを明るみに出すことを目的とする。主な手がかりとするのはフランス国立文書館 Archives nationales に所蔵された百年祭関連の一連の公文書（資料系列 F21/8439 [1]）であるが、フォーレの生誕百年にかかわる出版物や、

フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France およびパリのマーラー音楽資料館 Médiathèque musicale Mahler（MMM）における関連資料（Fonds Marguerite Long）も併せて参照する。

本稿は全３節から構成される。はじめに、この記念行事の開催経緯と公式な運営母体、そしてパリで行われた一連のイベントの内容を概観する。続いて、この記念行事の発端に、フォーレの音楽の普及を目指して戦前に設立された組織「ガブリエル・フォーレ友の会 Société des amis de Gabriel Fauré」が関与している可能性を指摘する。最後に、百年祭にまつわる同時代の言説を通して、占領期という苦難の時代を通じてフォーレという作曲家に与えられた新たな意味合いを明らかにする。

１．「百年祭」開催の経緯

フランス国立文書館所蔵の資料群 F21/8439 によれば、フォーレ生誕百年祭の企画の発端は遅くとも 1945 年１月末に遡る[2]。ナチスの連合国への無条件降伏はその約３か月後の 1945 年５月７日（降伏文書への調印は８日）であるから、パリの百年祭がナチス降伏の４日後（５月 11 日）という絶妙のタイミングで始まったのはまったくの偶然といえる。とはいえ、前年の夏までナチスの支配下にあったこの都市の状況を考える限り、百年祭がこうした時代背景と全く無関係に営まれたと考えることは難しい。

国家の中央行政関係の文書を多数所蔵する国立文書館にフォーレ百年祭関係の比較的まとまった量の文書が残されているのは、そもそもこのイベントが「政府の主導で」[3]実現したものであったからである。この文書館の資料を見る限り、政府内における百年祭企画の最初の発信源は情報省[4]であったと思われるが、イベント自体は最終的に国民教育省の主導で行われることとなった。百年祭のプログラム冊子[5]には、大きく「国民教育大臣ルネ・カピタン氏のご後援による sous le haut patronage de M. René Capitant, Ministre de l'Éducation Nationale」の文字があり、実行委員会 Comité d'action の委員長は国民教育省の芸術・文学局 Arts et des Lettres 局長ジャック・ジョジャール Jacques Jaujard（1895-1967）、副委員長は同スペクタクル・音楽局 Spectacles et de la Musique 局長アンドレ・オベ André Obey（1892-1975）が務めている。

上記のプログラムに記載された実行委員会のメンバー・リスト（資料１b）にはまた、外務省と国民教育省の傘下にあるフランス芸術活動協会 Association Française d'Action Artistique（AFAA）の会長フィリップ・エルランジェ Philippe Erlanger（1903-1987）と外務省文化交流局芸術行事課長 Chef de la Section des Manifestations Artistiques de la Direction Générale des Relations Culturelles の名前がある。これらの人物の関与は、この百年祭が単なる国内向けのイベントではなく、諸外国との関わりをも重視したものであった

資料１　フォーレ百年祭委員会の構成員

ａ）名誉委員会 Comité d'honneur

ソビエト社会主義共和国連邦大使アレクサンドル・ボゴモロフ閣下およびボゴモロフ夫人、英国大使アルフレッド・ダフ・クーパー閣下およびダイアナ・クーパー夫人、アメリカ合衆国大使ジェファーソン・キャフェリー閣下、ベルギー大使ジュール・ギヨーム男爵閣下およびギヨーム男爵夫人、スイス代理大使エルネスト・シュラッテル氏およびシュラッテル夫人 ジョルジュ・デュアメル氏（アカデミー・フランセーズ）、ポール・ヴァレリー氏（アカデミー・フランセーズ）、レイナルド・アーン氏（学士院会員）、ド・ゴール将軍内閣官房長パレウスキ氏、文化関係局局長ロジエ氏、フランス海外大学文化関係課長トマ氏 ルイ・オベール、ジョルジュ・オーリック、バンベルク、ピエール・ブリッソン、ジョゼフ・カルヴェ、ポール・クローデル、ロジェ・デゾルミエール、E. フォーレ＝フレミエ、Ph. フォーレ＝フレミエ、アンリ・グアン、カン、マイヨ、マレルブ、モーリス・マレシャル、マルゴ＝ノブルメール、シャルル・ミュンシュ、ドルメソン侯爵、パンゼラ、ポール・パレ―、フランシス・プーランク、リーデル、マニュエル・ロザンタールの各氏

ｂ）実行委員会 Comité d'action

会長：J. ジョジャール氏、芸術・文学局長 副会長：A. オベー氏、スペクタクル・音楽局長 委員：国立歌劇場会議支配人、アンリ・バロー氏（フランスラジオ放送音楽部長）、クロード・デルヴァンクール氏（国立音楽演劇学校長）、ロジェ・デュカス、Ph. エルランジェ（フランス芸術活動協会会長）、J. イベール（フランス・アカデミー館長）、アンリ・ド・ジュヴネル夫人、ケクラン氏、ポール・レオン氏（芸術局名誉局長、学士院会員）、マルグリット・ロン夫人、スション氏（文化交流局芸術行事課長）、ジャック・ティボー氏 事務局：ド・ゴントー＝ビロン、ジャン・ソヴォワ各氏：

典拠："Centenaire Gabriel Fauré,"［1945］（Bibliothèque Nationale, Dossier Fauré, Rés Vm dos 28, 5）

ことを示している。実際エルランジェは、1945 年 4 月 27 日の実行委員長ジョジャール宛ての書簡において、以下のように述べている。

> 4 月 21 日付でお手紙を拝受いたしましたのを受け、文化関係局に連絡を取り、ガブリエル・フォーレ百年祭の機会に企画されている行事に外国からの重要人物を参加させたいというご要望をお伝えしましたことをご報告申し上げます。外務省はこうした人々のフランス入国の助けとなるためにあらゆる支援を行う所存です。

この AFAA と外務省の介入の成果は百年祭の名誉委員会 Comité d'honneur のメンバー・リスト（資料１a）に端的に表れている。フランス国内の芸術界・音楽界の大家やフォーレ自身の親族を差し置き、このリストの筆頭に置かれているのは、ソ連大使、イギリス大使、アメリカ大使、ベルギー大使、スイス公使――すなわち第二次世界大戦の連合国を中心とする国の外交官とその夫人なのである。もっとも、このうちイギリスとアメリカの大使は、名

誉委員任命への感謝の意とともに百年祭には出席できない旨を書面で知らせてきた。1945年5月10日付の実行委員長宛ての書簡において、アメリカ大使ジェファーソン・キャフェリー Jefferson Cafferey（1886-1974）は百年祭には代理人を送るとし、以下のように述べている。「賜りました名誉に感銘を受けております。フォーレはフランス文化を世界に広めた現代の偉大な作曲家のうちで卓越した地位を占めていると考えているからです。」こうした文言は、百年祭というイベントの根底に、フォーレをフランス文化の世界的顕揚という文脈の中で位置づける態度があることを示唆する。実際、百年祭の実行委員会が国民教育大臣宛てに送付したと見られる文書（日付・執筆者不明）は、この生誕百年の行事がフォーレの名を借りつつも「国家の宣伝を目的として dans un but de propagande nationale」（下線による強調は原文ママ）行われるものであったことを明らかにしているのである。

実行委員会側はまた、国家的行事としての百年祭の性格を強調するために、政府の更に上層部にまで掛け合った形跡がある。というのも、国民教育大臣は1945年4月、当時のフランス臨時政府主席シャルル・ド・ゴール Charles de Gaulle（1890-1970）宛ての書簡において、上記の外交官らの招待に言及しながら、フォーレに「望ましい威光を付与するため」ド・ゴール自身によるオープニング・コンサートの後援と主宰を依頼しているからである。大臣はまた、同じ手紙の中でこの演奏会がパリ音楽院演奏協会 Société des Concerts du Conservatoire の協力を得て「現在ドイツで従軍中もしくは拘留中のこの学校［パリ音楽院］の生徒たちのために」行われるものであることを強調している。同封された百年祭の名誉委員会の仮メンバー・リストからは、パリ解放の英雄でもあるシャルル・ド・ゴール自身がこのイベントの「名誉委員長 Président d'honneur」を務めるというのが当初のプランであったことが窺える[6]。このド・ゴールへの依頼は結局受諾されなかったようであり、ド・ゴール将軍内閣官房長のガストン・パレウスキ Gaston Palewski（1901-1984）が名誉委員会のメンバーに名を連ねるのみにとどまった。いずれにせよはっきりしているのは、フォーレの生誕百年祭がこの作曲家個人の記念という域をはるかに超えた、すぐれて政治的なイベントであったということである。

1945年5月11日から17日にかけてのいわゆる「フォーレ週間 Semaine Fauré」の間にパリで行われた一連のイベントには12.5万フランの予算が組まれ[7]、政府は助成金として10万フランの支給を実行委員会に約束した[8]。資料2はそのプログラムの概要を示したものである。初日はシャンゼリゼ劇場において、前述のとおりパリ音楽院演奏協会管弦楽団による「捕虜・国外追放となったパリ音楽院生徒のため」の演奏会が行われた。フォーレの誕生日当日に当たる12日には実行委員会・名誉委員会のメンバーを中心とするパリ市内での昼食会を経て、夕方に旧音楽院コンサート・ホール[9]で非公開の記念式典が開催されている。ここでは国民教育大臣の講演のほか、フォーレの胸像の「戴冠式 couronnement」や生徒たちによるフォーレ作品の演奏が行われた[10]。パリ音楽院ではまた、この「フォーレ週間」の期

資料２　パリのフォーレ百年祭（1945 年５月）のプログラム

日時	会場	曲目	出演者
５月 11 日（金） 20：30 開始	シャンゼリゼ劇場	ペレアスとメリザンド組曲、バラード、レクイエム	マルグリット・ロン、シャルル・ミュンシュ、音楽院演奏協会管弦楽団、Ch. カステッリ、B. ドゥミニ , パリ大学合唱団（ジャン・ジトン指揮）
５月 12 日（土） 17：00 開始	パリ音楽院ホール	ガブリエル・フォーレへのオマージュ	公教育大臣列席
５月 14 日（月） 18：30 開始	国立オペラ座	ペネロープ	指揮：フランソワ・ルールマン ジュヨル、ルフォール、リキエ、サン＝タルノー、アルモナ、アミー、ボニー＝ペリウ , クヴィドゥ、ジュアット、カバネル、ルケティ、エチュヴェリー、デエ、カンボン、ルロワ
５月 16 日（水） 20：30 開始	サル・ガヴォー	ピアノ四重奏曲第１番ハ短調、歌曲、エレジー、ヴァイオリン・ソナタ	マルグリット・ロン、ジャック・ティボー、レイナルド・アーン、シャルル・パンゼラ、モーリス・ヴュー、モーリス・マレシャル
５月 17 日（木） 20：45 開始	シャンゼリゼ劇場	プロメテ	国立フランスラジオ放送管弦楽団、指揮マニュエル・ロザンタール、出演：エレン・ドシア、シュザンヌ・ジュヨル、シュザンヌ・ルフォール、マルヴァジオン、ルネ・デエ、リュシアン・ロヴァノ
５月 14 ～ 19 日	パリ音楽院	展覧会（肖像画と自筆譜）	

典拠：“Centenaire Gabriel Fauré,” [1945] (Bibliothèque Nationale, Dossier Fauré, Rés Vm dos 28, 5)

間に合わせて、フォーレの自筆譜や肖像画などの展覧会も開催されていた。「フォーレ週間」後半では、５月 16 日の室内楽演奏会を挟んで、14 日と 17 日にフォーレの二つのオペラ《ペネロープ *Pénélope*》(1907-13) と《プロメテ *Prométhée*》(1900) がそれぞれオペラ座とシャンゼリゼ劇場で上演されている。このうち《プロメテ》は演奏会形式の上演であったが、２年前にオペラ座のレパートリーとなっていた《ペネロープ》の方は舞台装置付きの通常のオペラとして上演された。

２．百年祭の「出所」

このように、フォーレの生誕百年祭は国費による多額の助成を受け、国民教育省を中心とするフランス政府の主導によって盛大に執り行われた。一方、フォーレの愛弟子であった作曲家のロジェ＝デュカス Jean Roger-Ducasse（1873-1954）は、この一連の記念行事について以下のように回想している。

> フォーレは惜しげなく祝賀された。しかし、彼の息子たちと私は、こうした行事の出所に鑑みて自宅に留まった。ある種の演奏家にとっては、わが師の愛しき名と作品は宣伝の口実に過ぎないのだと、私はよくわかっていた。彼のことを知らなかったり、彼と仲たがいしてしまったりしたような演奏家たちである。（Nectoux 2008, 607）

ここで仄めかされている人物、少なくともそのうちの一人は、ピアニストでパリ音楽院名誉教授のマルグリット・ロン Marguerite Long（1874-1966）[11] であったと考えられる。ロンはこの百年祭の実行委員かつ主要な出演者の一人（オープニング・コンサートでピアノと管弦楽のための《バラード》のソリストを務め、５月16日の室内楽演奏会にも出演）で、生前のフォーレとは約10年にわたり演奏家として公私にわたる交流をもった人物である。彼女はフォーレ作品の極めて熱心な信奉者であったが、勤務先のパリ音楽院での昇進問題等をめぐって次第に院長のフォーレから疎まれることとなり、両者の関係は1913年以降完全に断絶した（Long 1963, 68ff）[12]。

こうした生前の「仲たがい」にもかかわらず、ロンは1924年の作曲家の死を経て、長年演奏家・教育者として取り組んできたフォーレの音楽を世に広めるための啓蒙活動に乗り出した。1935年５月には友人のジェルメール・ド・ジュヴネル Germaine de Jouvenel とともにオペラ座で大規模なフォーレ祭を開催し、これを機に設立された「ガブリエル・フォーレ友の会」では副会長に就任した[13]。フランス国立図書館音楽部門所蔵の1938年の定款（請求記号 Rés Vm dos 28, 2）によれば、この友の会の目的は、「ガブリエル・フォーレの思い出を永続化させ、フランス、植民地、海外におけるその作品のより一層の普及を図る」ことである。一方、同じ1938年付の同会の入会書類（同請求記号 Rés Vm dos 28, 2）は、フォーレという作曲家をフランスの「真髄（génie）を最も完全に表現した人々の内の一人」と位置づけ、その作品の普及は国家の大義にも資するものであるともしている。フォーレ作品の普及活動を国家の利益と結び付けるというこのロジックは、設立者兼会長の夫である政治家のアンリ・ド・ジュヴネル Henry de Jouvenel（1876-1935）や、役員のロベール・ブリュッセル Robert Brussel（1874-1940）が、フランス芸術活動協会（AFAA）の会長を歴任した

人物であったこととも関係が深い。第１節でも述べた通り百年祭にも関与していたこのAFAA は、海外におけるフランス芸術の普及と顕揚を最大の目的とする組織であったからだ。

既に見たように、国立文書館所蔵の公文書からは、百年祭の案が情報大臣を通じて政府に持ち込まれたものであることが確認できる。一方、先に引用したロジェ＝デュカスの発言においては、フォーレを単なる「宣伝の口実」とする「ある種の演奏家」が、この百年祭の「出所」と説明抜きで同一視されている。これらの点は、百年祭の企画がもともと上記の「フォーレ友の会」（とりわけロン）を通じて情報省に持ち込まれたとするなら説明がつくであろう。実際、会長のド・ジュヴネル夫人と副会長のロンはともに百年祭の実行委員を務めており、政治筋の人脈とも関係の深い人物であったし、「友の会」が掲げたフォーレ普及運動の意義に関する説明は AFAA を介して「国家の宣伝」という百年祭のイデオロギーともつながっていた。ロジェ＝デュカスが批判している「宣伝」とは、一見すると単なる演奏家の自己宣伝を指しているようにも思われるが、実際には国家によるフォーレの政治利用への介入を指すものであったと推測できるのである。

フォーレ研究者のジャン＝ミシェル・ネクトゥー Jean-Michel Nectoux はフォーレの没後、ロンに代表される「フォーレ友の会」とロジェ＝デュカスやフォーレの息子たちとの間に、フォーレ音楽の普及や伝承をめぐって対立が存在していたことを指摘しており[14]、百年祭も「こうした対立を消し去りはしなかった」（Nectoux 2008, 607）と述べている。しかし、ここで指摘しておくべきは、百年祭を欠席したと述べているロジェ＝デュカス自身が、実際にはこの行事の実行委員会の一員であったという点である（資料１b）。百年祭の際、同様に「自宅に留まった」というフォーレの息子、エマニュエル Emmanuel Fauré-Fremiet（1883-1971）とフィリップ Philippe Fauré-Fremiet（1889-1954）もまた、この行事の名誉委員会のメンバー・リストに名を連ねている（資料１a）。つまり、彼らはこの記念行事を単なる部外者として傍観していたのではなく、フォーレの関係者として表向きには「委員」の役割を引き受けながら、ささやかな抵抗として自宅待機を選んだのである[15]。そこにはおそらくロンという演奏家個人に対する反感[16]だけではなく、彼らの敬愛する創作者であり生身の人間であったフォーレが、「宣伝」の名のもとに単純な記号に還元され、政治的な文脈に持ち込まれたことへの失望もまた含まれていたのであろう。

３．解放のシンボルとしてのフォーレ

この 1945 年のフォーレ生誕百周年祭の文化史的位置づけを考えるうえで忘れてはならないのは、その４年前にナチス・ドイツの先導で行われたモーツァルト没後百五十周年の記念行事である。ジャン・グリバンスキ Jean Gribenski（2013）が指摘するように、ナチスはそ

のプロパガンダの一環として、1941 年にドイツ・オーストリアのみならず枢軸国や被占領国でもモーツァルト関連のイベントを大々的に実施した。占領下のパリで開催された「モーツァルト週間 Semaine Mozart」（1941 年 7 月 13 ～ 20 日）と「大モーツァルト祭 Grand Festival Mozart」（1941 年 11 月 30 日～ 12 月 7 日）もその一部である。偉大な「ドイツの音楽家」としてのモーツァルト像を広めようとしたナチスは、《フィガロの結婚 Le nozze di Figaro》などの台本作家ダ・ポンテ Lorenzo Da Ponte（1749-1838）のようなユダヤ人とモーツァルトとの関わりをできるだけ不可視化したうえで、作曲家が残したおよそ唯一のドイツ愛国的な言説を文脈度外視でたびたび引用するなどの恣意的な言論操作を行った（Gribenski 2013: 97-98）。

こうしたモーツァルトの記念行事がナチスによる支配の象徴の一つであった[17]とすれば、同様の手段でそこからの解放を象徴することになったのが、1945 年にフランス政府の主導で行われたフォーレ生誕百年祭であったと考えられる。既に見た通り、この百年祭のプロパガンダ的性格は、連合国大使の招待や、捕虜・国外追放者のための演奏会などの形でも明確に表れているが、以下に挙げるような関係者の言説もそれを裏付けている。

たとえば実行委員会のメンバーであった前述のマルグリット・ロンは、百年祭に関するある新聞記事の中でフォーレを「フランス近代音楽の偉大な改革者、大いなる愛国者」[18]と位置付けており、同時期に行われた別の講演[19]でも以下のように述べている。

> 時の神は物事を実によくなしたまい、この年、この 1945 年 5 月 12 日、フランス精神がその役割を演ずる勝利への敷居をまたぐとき、フランスの偉大な天才、私たちの偉大なガブリエル･フォーレの生誕百年の時が来るでしょう。私たちの生きるこの悲劇の時代、大きな希望をよそに心を締め付けるこの不安の中で、ガブリエル・フォーレは私たちに一陣の澄んだ風を送り、世界の――この激動を被った世界の――あらゆる感性、あらゆる詩情をもたらしてくれるのです。（……）すでに何十年も前に、フランス音楽がある異なる方向へと舵を切ったとするなら、それはガブリエル・フォーレのおかげです。決して生彩を失うことなく、今日フランス芸術の輝かしい真髄である、このフォーレ様式を創出し、ドビュッシーやラヴェルもそこに加わることとなるあらゆる近代フランス音楽への道を開いたのは彼なのです。フォーレの音楽は一時代を切り開いたものではあれ、一時代のみに留まるものではないというそのことこそが、彼の音楽の永続性を保証しています。フォーレはフランスの天才音楽家（un musicien français de génie）にしてフランスの真髄を表した音楽家（un musicien du génie français）なのです。（下線は引用者による）

こうしたフォーレの「フランス的」性格の強調は、同じく実行委員会のメンバーであったパ

リ音楽院長クロード・デルヴァンクール Claude Delvincourt（1888-1954）の言葉においても顕著に認められる。彼はパリ音楽院で開催されたオープニング・コンサートのプログラム冊子に次のような文章を寄せている。

> 生誕百年の機会にガブリエル・フォーレの追憶に捧げられたオマージュは、われらの生きる心揺さぶる時代に特別な意味合いを帯びる。世界の音楽の様々な潮流が、我が国の真髄（notre génie national）の古来の伝統が埋没の危険にさらされるほどの毒性をもってわれらの土地に押し寄せた時代、ジョスカン・デ・プレ、クロード・ル・ジューヌ、ドラランド、ラモー…といった人々の誕生をみた日の当たる土地を、ヴァーグナーや偉大なドイツのロマン主義者たちの巨大な影がその黄昏によって包み込もうとしていた時代に、フォーレはフランス精神の抵抗（レジスタンス）（la résistance de l'esprit français）を体現していた。意識的であれ無意識であれ、こうした精神的侵略の加担者となった者たちの中でただ一人（あるいはそれに近く）、彼は純粋なままであった。（下線は引用者による）

このようにフォーレを「フランス的」な作曲家として位置づける言説自体はもちろん、とりたてて目新しいものではない。たとえば上で引用したロンの言葉は、彼女の夫でもある音楽著述家ジョゼフ・ド・マルリアーヴ Joseph de Marliave（1873-1914）の 1909 年の批評（「我らが人種の真髄が持つかけがえのない希少なものすべては（…）彼［フォーレ］自身の天才の中に見いだされる」（Marliave 1917, 34））のパラフレーズであると考えられるし、批評家のジャン＝オブリ Georges Jean-Aubry（1882-1950）は 1916 年の著書の中で、フォーレについて「これほどフランス的な者はない」とまで断言している（Jean-Aubry 1916, 72）。しかし重要なのは、上記のフォーレの「フランス的」性質が、ここでは特にドイツの占領に対するレジスタンスの暗喩として捉え直されているという点である。とりわけデルヴァンクールは、ヴァーグナーを中心とするドイツ・ロマン主義音楽の影響を免れた希少な純フランス的作曲家としてフォーレを位置づけることで、このナラティヴを明確なものにしている。

実際には、フォーレは恩師であるサン＝サーンスなどの影響を通じて 18 ～ 19 世紀のドイツ音楽に親和的な感性を長年持ち続けていたし、若い頃にはヴァーグナー鑑賞目的で毎年のようにドイツの劇場を訪れていた時期もある。彼はサン＝サーンスと同様に自らを「折衷主義」（Caballero 1999: 608）と呼び、フランスの音楽界全体が排外主義的愛国主義に染まっていた第一次世界大戦中にすら、近代フランス音楽の形成においてドイツの作曲家が果たした役割について肯定的な考えを表明していた。オペラ《ペネロープ》における音楽の連続性やライトモティーフの使用には、ヴァーグナーの「微妙な影響」を見出す（Fulcher 2018 : 102）ことも可能であるし、作曲家の生前には、純粋器楽作品においてすらフォーレをヴァーグナーと結び付ける見方が存在していた[20]。フォーレを「フランス精神の抵抗」として位置

づけるデルヴァンクールの言葉は、したがってこの音楽家自身の実像を反映しているというよりは、解放期のフランスという固有の時代の中で意識的に作り出されたものであったといえる。

解放期特有のフォーレ像に関するもう一つの注目すべき点は、ロンの言説にも示唆されている「希望」のナラティヴである。不安な時代においてもゆるぎなく輝き続けるフランスの「真髄」の永続性の象徴としてのこのフォーレ観は、百年祭で上演されたオペラ《ペネロープ》に対する同時期の批評にも見出すことができる。ホメーロスの『オデュッセイア』を原案とするこのオペラ（ルネ・フォーショワ René Fauchois（1882-1962）の台本による）では、長旅に出る英雄ユリース Ulysse ではなく、あまたの求婚者をかわしながら彼の帰還を辛抱強く待つ妻のペネロープ Pénélope が主人公となっている。1913年の初演以来、上演機会にあまり恵まれてこなかったこのオペラが、伝統あるパリ・オペラ座のレパートリーとなったのは占領下の1943年のことであった[21]。「フォーレ百周年」と題された1945年の冊子の中で、批評家のルネ・デュメニル René Dumesnil（1879-1967）はこの1943年の《ペネロープ》上演を以下のように回顧している。

> この頃、上演は警報によって中断され、長い待機の不安がすべての人の心に重くのしかかっていた。（…）フランスの聴衆に交じっていた緑の制服の敵軍の兵士たち[22]は、我々の目には自分たちが求婚者たちと同様であったという事を理解していただろうか？そして我々もまた、ペネロープと同様「包囲作戦」によって、また彼女以上に「誰も信用することなく」、その強い力で我々を解放してくれる者を粘り強く待っていたのではなかろうか？かくも明るく、純粋で、フランス的で、人間的なすばらしい音楽！（…）我々はこうした音楽の固有の美徳、永続的で奥深い意味合いと、この先ごろの思い出を結び付けずに聴くことはできないだろう！（Dumesnil 1945 : 31-２）

一方、1943年当時の《ペネロープ》の上演評（［Anon. ］1943 ; Berlioz 1943; Brussel 1943, Faure 1943）を見ると、その内容はオーケストレーションの巧拙にかかわる論評が中心で、物語や上演自体に政治的な意味を読み込むものは見られない。いつ帰るとも知れぬ夫を待つヒロインの姿を、解放を待つ占領下のフランス人になぞらえる、上記のような《ペネロープ》解釈は、「解放」が現実となった戦後においてようやく表に出てきたイメージなのである。百年祭における再演が、こうした新たな解釈の確立の根源の一つとなったことは疑いない。

《ペネロープ》に与えられたこの新しい意味合いは、1957年に没後出版（執筆年不明）されたフォーレの次男フィリップの手記「フォーレの信頼についての考察 Réflexions sur la confiance fauréenne」（Fauré-Fremiet 1957 : 131-143）にも認められる。フィリップはこの文章を百年祭の回顧（本稿冒頭のエピグラフ参照）で始めているのだが、《ペネロープ》は

ここでは文字通り「解放のオペラ」(Fauré-Fremiet 1957 : 141) と形容されている。フィリップがこの百年祭に対して複雑な感情を抱いていたことは本稿第２節において言及した通りだが、彼の手記にはこの記念行事を通じてフォーレに与えられた新たな意味付けがこだましている。彼がここで「confiance fauréenne（フォーレの信頼)」という言葉で意味するのは「われわれの心のなかに希望以上のもの、落ち着いた信頼というものを目覚めさせる」(Fauré-Fremiet 1957: 136）というこの作曲家の性質であるが、これは上掲のロンの記事の中で言及されていた、苦難の時代の中の希望の象徴としてのフォーレ像とも結びつくものであったといえよう。

結び

本稿では、ナチス・ドイツからの解放後間もない時期にフランス政府の肝いりで行われたフォーレ生誕百年祭について、その国家宣伝的な性格を確認するとともに、そこでフォーレに与えられた新たな歴史的意味について考察した。生前から今日に至るまでしばしば優れて「フランス的」な音楽家と評価されてきたフォーレであるが、この「フランス的」というイメージはいうまでもなく、各時代においてこの作曲家に向けられた固有の期待や意味付けの蓄積が形成してきたものである。1941 年にナチスの先導で行われたモーツァルトの没後百五十年祭が「ドイツ」音楽の「偉大さ」を喧伝するものであったとするなら、1945 年のフォーレ百年祭はこのプロパガンダを新たな時代の勢力図によって上書きする試みであったともいえよう。そこでのフォーレはあくまで「フランス的」で「純粋」かつ「永続的」な存在でなければならなかったが、そこには新しい時代への希望をもたらす存在としてのナショナル・アイコンに対する解放期特有の期待が差し向けられていたのである。

付記：本稿で参照した未刊行資料は、笹川科学研究助成（研究番号 27-142）および日本学術振興会特別研究員奨励費（研究課題番号 13J03231）による過去の資料調査で収集したものである。

注

1　F21 はフランスの国民教育省に属する芸術局 Beaux-Arts 関連の資料系列。うち F21/8420 ～ 8439 は野外演劇、フェスティヴァル、記念行事にあてられたものである。

2　この資料群において、百年祭についての最初の言及がみられるのは、情報大臣から国民教育大臣あての 1945 年 1 月 29 日付の書簡となっている。

3　アリエージュ県知事から国民教育大臣宛ての書簡、1945 年 3 月 4 日（F21/8439)。

4　1938年に設立された宣伝省 Ministère de la Propagande を前身とする。

5　国立文書館（F21/8439）に加え、フランス国立図書館（請求記号 Rés Vm dos 28, 5）にも同冊子が所蔵されている。

6　メンバー・リストにおけるド・ゴールの名前は後からペンで消されている。

7　スペクタクル・音楽局長（実行委員会副会長）から芸術・文学局長（同会長）あての書簡、1945年4月23日。

8　文学局参事官ジャン・イティエール Jean Hytier からスペクタクル・音楽局長宛ての書簡、1945年11月27日。あわせて地方都市におけるフォーレ生誕百周年関係の演奏会等についての調査も行われ、とりわけフォーレの出身地であるアリエージュ県（生誕の地パミエおよび幼少期を過ごしたフォワ）のイベントに対しては2.5万フランの助成金が支給されている。すなわち政府が関与しようとしたフォーレ記念行事はパリだけではなくフランス全土に及んでいたのである。百年祭実行委員長のジョジャールはさらに、4月8日付の国民教育省長への手紙の中で、この「フォーレ週間」中はすべての初等・中等学校においてもフォーレに関する講演が行われることが望ましいと述べている。

9　この旧音楽院ホールとは、パリ音楽院が当時のマドリッド通り14番地の建物に移転する前に居を構えていたコンセルヴァトワール通り2番地2にあったものを指す。

10　芸術・文学局長から国民教育大臣あての書簡、1945年4月18日。

11　ロンとフォーレの関係の詳細に関しては拙論（神保 2016）を参照のこと。

12　フォーレが懇意にしていたヴァイオリニストのロベール・クレトリー Robert Krettly（1891-1956）が伝えるところによれば、作曲家はロンのことを「私の名前を利用してのし上がろうとする恥知らず」（Nectoux 2008, 404）と評していたという。弟子であるロジェ＝デュカス自身もまた、ロンに対するこの種の見方を共有していた可能性がある。

13　この協会はその後もフォーレ作品の普及・振興を目的としたいくつかのイベントを開催するも、第二次世界大戦勃発によって事実上の活動休止に追いやられる（Long 1963, 96）。

14　フランス国立図書館所蔵のフォーレ協会関連文書（請求記号 Rés Vm dos 28, 2）によれば、「友の会」への対抗組織として1938年に立ち上げられた「フォーレ室内楽協会 Société fauréenne de musique de chambre」ではロジェ＝デュカスが副会長を務め、フォーレの息子たちも会員となっている。

15　5月12日に行われた百年祭昼食会の招待リストにも「フォーレ＝フレミエ諸氏」の名前は含まれているが、彼らが実際に参加したかどうかは不明である。

16　フォーレの次男のフィリップは、ロンによるフォーレ普及活動の「度を越した情熱」（Nectoux 2008, 607）を快く思わず、彼女の言動に対しては批判的な立場をとっていた。

17　この時ウィーンで行われた記念行事に赴いた多くのフランス人音楽家たちを、ミリアム・シメーヌは対独協力者として位置付けている（Chimènes 2001, 29）。

18　マーラー音楽資料館所蔵の出典不明の切り抜き記事による（MMM, Fonds Marguerite Long, Écrits de Marguerite Long, « Le centenaire de Fauré », “11/05/1946（sic）”）。

19　ソプラノ歌手ノエミ・ペルージャ Noémie Pérugia（1903-1992）の出演する歌曲と室内楽の演奏会での講演の原稿であると思われる（MMM, Fonds Marguerite Long, Gabriel Fauré（Boîte 3), 12 pages manuscrites de M. Long）。

20　たとえばマルリアーヴはフォーレの《バラード》の曲想をヴァーグナーの楽劇《ジークフリート Siegfried》の〈森のささやき〉の場面との関わりでとらえている（Marliave 1917: 31-32）。

21　当時のパリの劇場においては、占領軍の文化政策によってフランス作品の上演が奨励されていた。《ペネローブ》もおそらくこの文脈において再演の機会を得たのであろう。

22　占領下のオペラ座では占領軍の権威筋に特権的に客席が割り当てられ、劇場の客席の半分以上はドイツ人によって占められていたという（Chimènes 2001: 114）。

主要参考文献

一次資料

Archives nationales（F21/8439）

・100e anniv. naissance Gabriel Fauré（1945）: 1945-1946

・Comité d'honneur: 6 avril-15 mai 1945

・Comité d'action en vue de la célébration de la naissance de Gabriel Fauré: 16 avril-29 juin 1945

・Province: 5 mars-12 novembre 1945

Bibliothèque nationale de France, Dossier Fauré（Rés Vm dos 28）

・2. [Société des amis de Gabriel Fauré, 1938].

・5.“Centenaire Gabriel Fauré” [1945].

Médiathèque musicale Mahler, Fonds Marguerite Long

※資料名は 2012 年 5 月付の資料館目録の記述に準拠

・Le centenaire de Fauré, 11/05/1946 [sic]（sans la source）（Écrits de Marguerite Long).

・Marguerite LONG: 1945（16/05）Centenaire de Fauré, Sonate pour piano et violon, M. Long, J. Thibaud +R. Hahn, Ch. Panzera, M. Maréchal, Paris, Salle Gaveau（Programmes）.

・Centenaire de la naissance de G. Fauré, mai 1845 [sic]: article de M. Long, “Arts” 11/05/1945（Gabriel Fauré).

・12 pages manuscrites de M. Long（Gabriel Fauré）.

刊行物

[Anon.] “Pénélope.” *Musiciens d'aujourd'hui* 6（June 1943): 3.

Berlioz, Pierre. “A l'Opéra: Pénélope.” Paris-Soir（20 March 1943): 1.

Brussel, Robert. “À l'Opéra: ‘Pénélope’ de Gabriel Fauré.” *L'Œuvre*（17 March 1943): 2.

Dumesnil, René. “Le centenaire de Gabriel Fauré.” In *Le centenaire de Gabriel Fauré*, pp. 29–35. Paris: Éditions de La Revue musicale, 1945.

Faure, Gabriel. “Naissance de ‘Pélélope’ de Gabriel Fauré.” *Comoedia* (6 March 1943): 1.

Fauré-Fremiet, Philippe. “La genèse de *Pénélope*.” In *Le centenaire de Fauré*, pp. 8–26. Paris: Éditions de La Revue musicale, 1945.

——*Gabriel Fauré*. Nouvelle édition. Paris: Albin Michel, 1957.

Jean-Aubry, Georges. *La musique française d’aujourd’hui*. Paris: Perrin et Cie., 1916.

Long, Marguerite. *Au piano avec Gabriel Fauré*. Paris: Julliard, 1963.

Marliave, Joseph de. *Études musicales*. Paris: Alcan, 1917.

二次資料

Caballero, Carlo. “Patriotism or Nationalism? Faure and the Great War.” *Journal of American Musicological Society* 52/3 (1999): 593-625.

Chimènes, Myriam ed. *La vie musicale sous Vichy*. Bruxelles: Éditions Complexe, 2001.

Dunoyer, Cecilia. *Marguerite Long: A Life in French Music, 1874–1966*. Bloomington: Indiana University Press, 1993.

Gribenski, Jean. “Mozart, ‘musicien européen’ ou créateur d’une musique ‘d’essence germanique’ ? Les célébrations à Paris en 1941.” In *La musique à Paris sous l’Occupation*, pp. 97-105. Edited by Myriam Chimènes and Yannick Simon. Paris: Cité de la musique/Fayard, 2013.

Fulcher, Jane F. *Renegotiating French Identity*. New York: Oxford University Press, 2018.

神保夏子「マルグリット・ロン（1874-1966）とフランス「三大巨匠」の誕生——フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルをめぐるナラティヴ形成と伝承のポリティクス」東京藝術大学大学院音楽研究科 2015 年度博士学位論文、2016 年。

Nectoux, Jean-Michel. *Gabriel Fauré: Les voix du clair-obscur*. 2e édition revue. Paris: Fayard, 2008.

The Centenary of Gabriel Fauré as a Symbol of the Liberated Paris

JIMBO Natsuko

This paper examines the context surrounding the commemoration festival, held in Paris in May 1945, celebrating the centenary of the birth of French composer Gabriel Fauré. Specifically, it examines the subject from the viewpoint of the reception history of French music during and after World War II. During this festival, there was a series of concerts dedicated exclusively to Fauré's works—including his two operas, both of which are not frequently performed—and the minister of National Education delivered a tribute speech at a ceremony at the Paris Conservatory.

The festival was organized under the patronage of this minister, and its acting committee included major governmental figures. This explains its overtly political nature, which was characterized by the appearances of allied countries' ambassadors and an invitation extended to the president, Charles de Gaulle himself (he eventually declined). In fact, according to official documents stored at the *Archives Nationales* (F21/8439), the festival was planned "for the purpose of national propaganda," where Fauré was regarded as "among the great contemporary composers who contributed to the spread of French culture worldwide."

The festival was held nine months after the Liberation of Paris and only four days after the capitulation of Nazi Germany, which in occupied Paris four years before had celebrated the 150th anniversary of the death of Mozart. Based on the discourses of members of the acting committee and new patriotic interpretations at the time of Fauré's opera *Pénélope*, which was staged during this festival, this paper clarifies that, through the occasion provided by the centenary, Fauré was made a symbol of the resistance and the Liberation of France.